

[特別支援教育]

重度・重複障害のある生徒に対する英語教材の工夫

－共生社会を目指す指導における通常教材へのアクセス－

笠原 友生*

1 問題

(1) 新学習指導要領における外国語教育

平成29年3月に幼稚園、小学校、中学校の、4月には特別支援学校の新学習指導要領が公示された。文部科学省(2017)の「小学校・中学校学習指導要領解説」で「グローバル化の進展や人工知能(AI)の飛躍的な進化など、社会の加速度的な変化」が述べられているように、これからは、社会の急速なグローバル化の進展に対応していくことが必要である。国民一人一人が、異文化理解や異文化コミュニケーションを今まで以上にできるようになり、国際共通語である英語力を向上させることが極めて重要な問題であると言われ、外国語教育については大きな改訂がなされた。例えば小学校では「外国語活動」を3・4年生で扱い、5・6年生は「外国語科」として教科を学ぶことになった。「外国語活動」については、現行は領域として抽象的な言い回しで書かれていたのに対し、今回は授業で何を行うかが具体的に書かれるようになったり、内容がCAN-DO形式で書かれ指導事項がさらに明確になったりした。

(2) 特別支援教育における外国語教育の推進

文部科学省(2017)の「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」では、「知的障害者である児童に対する教育を行う特別支援学校の小学部に就学する児童のうち、小学部の3段階に示す各教科又は外国語活動の内容を習得し目標を達成している者については、小学校学習指導要領第2章に示す各教科及び第4章に示す外国語活動の目標及び内容の一部を取り入れることができるものとする。」と明記された。しかし現状は、健常児と障害児の外国語(英語)の学びには大きな差があり、特に知的障害や重度・重複障害のある者はほとんど英語を学ぶ機会がない。なぜなら、英語学習は意味理解を問う内容やスピーキング・リスニングなどの4技能を総合的に活用するため、認知力、理解力の面で非常に高次である学習として位置づけられているからだと考える。個々の障害の実態を考慮した結果、英語が自立活動などに替えられて、他の指導が優先されがちになってしまうのである。もちろん、このような考え方に基づいた指導により成果が上がっていることは言うまでもない。重度・重複障害のある生徒(以下、「重複障害児」という)の認知発達面を考慮すると、通常校で行われるような意味理解中心の英語教育は非常に難しい。しかし、グローバル化社会の中で英語教育の推進が大変叫ばれる中、重複障害児だけが英語を学ぶことができないことに疑問を感じる。

(3) 教育課程の「連続性」

重複障害児が英語を学ぶ必要性については、新学習指導要領改訂のポイントの1つである教育の「連続性」に注目する必要がある。中央教育審議会(2016)の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(中教審第197号)」では、「小・中学校と特別支援学校との間での柔軟な転学や、中学校から特別支援学校高等部への進学などの可能性も含め、教育課程の連続性を十分に考慮し、子供の障害の状態や発達の段階に応じた組織的・継続的な指導や支援を可能としていくことが必要である。」と述べられている。従来は障害児の認知発達などを考慮して、通常の学校とは違った教材を取り入れた指導が多くあった。しかし、健常児、障害児を問わず互いに協働して問題を解決していくためには、この教育課程の「連続性」を確保し、同じ生活年齢の生徒が共通の教材で共通の文化を学ぶことができるように配慮することが大切である。共通の通常教材を活用した学びを保証し、障害の有無に関わらず共通の文化や経験をもつことで、お互いに共感し合ったり、協力し合ったりすることができるかと考える。そして、このことは今後の多様性を互いに認め合い尊重していく共生社会を築いていくためにも重要である。「連続性」を確保し、多様な人と協働しながら生き抜く資質を身に付けることを重視する新学習指導要領の方向性からも、通常校で学ぶ生徒と重複障害児が英語という共通の言語文化を学ぶことは大変重要であると考えられる。

(4) 重複障害児に対する英語の指導

実際、重複障害児も日常生活で英語に触れる機会は多様にある。例えばテレビ番組やCMでは、英語の歌詞の歌がたくさん使用されている。また、「ジュース」や「ゼリー」など、外来語が生活の身近な場面に溢れている。重複障害児でも、身近な場面

* 新潟県立東新潟特別支援学校

で英語に触れる機会は実に多いのである。そこで、英語指導におけるこれまでの指導のアプローチを見直し、第二言語習得は目的とせず、英語の音声や英語圏の音楽に慣れ親しませながら、英語を受け入れる素地を育むことを目的とする指導を重視することで、重複障害児に対する英語教育のアプローチが可能になるのではないかと仮説を立てた。グローバル化する社会に参加していく素地を育てるために、スピーキングなどの4技能育成を中心に据えた認知力重視の医学モデルから、生活年齢に応じた、親しむ・ふれる英語教育による社会モデルへの転換を目指す指導のあり方の可能性を探っていくこととした。

2 研究の目的

本研究では、重複障害児に対する英語教材を活用した指導の工夫を検証することを目的とする。

3 研究の方法

(1) 乳幼児の言語発達、第二言語習得の過程、乳幼児の英語教育の特徴などについて文献研究を行う。

(2) 重複障害児に対する英語教材を活用した実践研究を行う。

- ① 対象 肢体不自由特別支援学校の中学部における、各教科等を合わせた指導の授業「ミュージックタイム」を学ぶ重複障害児8人の内、4人を評価モデルとして抽出。
- ② 内容 言語活動を利用して英語教材を活用した指導の工夫。
- ③ 実践回数 全10回（平成29年6月～7月で週2回）

4 文献研究の結果

(1) 乳幼児の言語発達（出典：『発達がわかれば保育ができる！』）

- ・ 0か月～6か月 泣き声が自分の快、不快の気持ちを訴えるような発声になる段階である。それから喃語が盛んに出たり、多音節と母音が出たりしていく。この段階では、歌いかけて発声を引き出すようにすることや、発声や動作に意味づけをすることが大切である。
- ・ 6か月～1歳 大人が言ったことをオウム返ししたり、一語文で話したりするようになる段階である。この段階では、「～だね」などと気持ちを代弁しながらゆっくりと優しく語り掛けたり、発した一語文に合った実物を見せたりすることが大切である。
- ・ 1歳～1歳半 片言で話そうとしたり、名前を呼ばれると返事をしたりする。この段階では、自ら話しやすい雰囲気づくりをしたり、返事をしたことをしっかりと認める言葉掛けをしたりすることが大切である。

(2) 第二言語習得の過程（出典：『言語はどのように学ばれるか 外国語学習・教育に生かす第二言語習得論』、『英語学習は早いほど良いのか』）

- ・ リスニングまたはリーディングを通じて理解可能なインプットにさらされたときに言語は習得されるという仮説がある。
- ・ 早期英語教育の大きな鍵はインプットの充実と言われている。
- ・ 英語の音素の認識や音韻処理の自動化は、英語に直接たくさんふれることによって磨かれ、英語のリズムなどに関する語感が養われる。
- ・ 生徒を指導する際には、言語の機能面に注目させる、様々な視覚・聴覚刺激を使う、具体的な材料を提示するなどして注意をひき、それを維持するような工夫をする必要がある。

(3) 乳幼児の英語教育（出典：幼児英語教育関連ホームページ <https://www.kids.ecc.jp/course/minikids.html>等）

- ・ CDを聞き流すことやCD再生を定時に言い、自然に英語にふれる機会を確保することを特徴に挙げる英語教材が多く見られる。
- ・ 楽しみながら英語の学習を続けることができるよう、キャラクターをDVDに使用するなど、視覚的に興味を引きつける工夫がある。
- ・ 歌やダンスを取り入れて体を動かしながら学ぶことが多く取り入れられている。
- ・ 言葉と動きが連動した歌とダンスで体を動かしながら、何度もフレーズを繰り返すことや集中を持続させるためにテンポの速いレッスン展開にすることが見られる。

5 実践研究

実践において文献研究の結果から実践のポイントを以下のように整理した。

- ・ 教師との関わり合いを通して、楽しい雰囲気の中で英語を学習する工夫が必要である。
- ・ キャラクターなどの視覚的なモデルによって興味を引き出すことが有効である。
- ・ 4技能の中で「聞くこと」を特に重視することが大切であり、音楽を使った聴覚的な工夫を取り入れることで関心が大いに高まると考えられる。

よって、重複障害児の指導においては英語を聞いて親しむことを重点的に行うことが有効であり、英語の音楽の視聴や教師との関わりを通して、自分の気持ちを体の動きや表情、発声などで表現することをねらいとした。関わり合いや雰囲気作りの手立で、視覚的な手立で、聴覚的な手立でを工夫し、生徒の実態から、授業の前半約20分において実践にあたる英語学習を取り入れた。次頁に授業展開及び指導の工夫並びに生徒の反応を挙げる。(表1)

表1 授業展開及び指導の工夫

学習活動	指導の工夫 ●関わり合いや雰囲気作りの手立 ▲視覚的な手立 ■聴覚的な手立	生徒の反応
<p>“ABC”を聴いたり、動画を見たりして、自分の気持ちを体の動きや表情、発声などで表現する。(4分)</p>	<p>▲1 カラフルな動物などのキャラクターが登場する動画を用いて、興味を引きつける。 ●1 周りの教師が手拍子をすることで楽しい雰囲気を作る。 ■1 同じフレーズが繰り返される機会を設定する。 ■2 テレビ番組などで耳にしやすい歌で導入する。 ●2 活動の流れを一定にして、見通しをもちやすいようにする。 ▲2 大型テレビで動画を再生することで、視覚的に見やすいようにする。 ●3 生徒が集中して動画を見続けている場合は、言葉掛けを行わず、その様子を見守ることもある。</p>	<p>・単元の始めに曲を聴いたときは、特に表出は見られなかったが、単元の半ばから右手を動かして楽しい気持ちを表現することが見られた生徒がいた。 ・後半になると、動画が再生されるときに、すぐに高い声で「いー」と声を出しながら笑う様子が見られた生徒がいた。</p>
<p>“The Star Spangled Banner”を聴いたり、外国人に扮装した教師と関わったりして、自分の気持ちを体の動きや表情、発声などで表現する。(4分)</p>	<p>▲3 赤、白、青で描かれ、視覚的に注意を引きやすいアメリカの国旗を静止画に用いて、曲のイメージ像をもちやすいようにする。 ▲4 国歌を聴いた後、外国人のような髪型などの扮装をした教師が登場することで、場面展開を分かりやすくするとともに、興味をもたせる。 ●4 教師が“Hello”などと積極的に生徒に話し掛けて、コミュニケーションを楽しみながら英語にふれる機会を設定する。 ●5 教師の働き掛けに対して、手を挙げたりタッチをしたりするなどの反応を示した場合、英語でその気持ちを代弁し、意味付けとして返すようにする。</p>	<p>・扮装した教師が“Hello”などと言葉を掛けると、積極的に手を握ったり、声を出しながらうなずいたりした生徒がいた。 ・授業を重ねるごとに、扮装した教師を注視することが増えた生徒や、目を大きく見開きながら教師が近づくの期待する様子が見られた生徒がいた。</p>
<p>“Head, Shoulders, Knees and Toes”を聴きながら、様々な教師と触れ合い、自分の気持ちを体の動きや表情、発声などで表現する。(7分)</p>	<p>●6 教師が歌詞に合わせて、生徒の体の部位を触ったり、手を取って一緒に動かしたりして、ダンスのように楽しみながら活動できるようにする。 ●7 教師が歌の切れ目に交代することで、様々な教師と触れ合う機会を設定して、コミュニケーションを楽しめるようにする。 ■3 徐々にテンポを上げて、歌の中でもメリハリをつけることで、集中を維持しやすくする。 ■1 同じフレーズが繰り返される機会を設定する。 ■2 テレビ番組などで耳にしやすい歌で導入する。</p>	<p>・授業を重ねるごとに、触れ合う教師を見つめる時間が延びて、期待感の高まりを表現した生徒がいた。 ・最初は舌を出して拒否を表したが、単元の半ばから、教師をよく見続けたり、「いー」と声を出しながらにっこりと笑ったりして楽しい気持ちを表現するようになった生徒がいた。</p>
<p>“Sukiyaki”を聴いたり、動画を見たりして、自分の気持ちを体の動きや表情、発声などで表現する。(5分)</p>	<p>●8 最初は日本語版の「上を向いて歩こう」を聴かせ、英語で聴く前の予備知識を与える。 ■4 日本語版を聴いた後に英語版の“Sukiyaki”を聴かせることで、言葉の雰囲気の違いを感じやすいようにする。 ▲5 外国人が歌う動画を見せることで、普段周りにいる家族や教師と違う雰囲気を感じられるようにする。 ●9 同じ流れで授業を重ねていくが、途中から日本語版は聴かせないようにいき、英語版だけを耳にする機会を設定することで、英語版の方に親しみがもちやすいようにする。 ■5 単元の後半に、別の外国人の英語版を聴かせることで、人が変わるによって英語も声や雰囲気が変わることを感じやすいようにする。 ■6 リズミカルな曲の後にしっとり落ち着いたテンポの曲を流し、曲のメリハリをつけることで、生徒が集中を維持しやすくする。 ■7 休み時間など、授業以外の時間でも同じ曲をCDで流し、耳にする場面を設定する。</p>	<p>・最初は目を大きく開いてきょろきょろと周りを見渡し、いつもと違う様子を見せた生徒がいた。日本語の曲の時はにこっと笑っていたため、異なる反応であった。その後、授業を重ねていくと、慣れてきたのか、ゆっくりと顔を左右に動かして、周りから聞こえてくる音に耳を傾けるような姿が見られた。 ・日本語の時よりも体の動きが小さかったり、声を出すことが少なかったりして、慣れない様子が見られた。しかし、単元の後半では、体を大きく動かしたり、「あーあー」と大きな声を出したりすることが増え、楽しい気持ちを積極的に表現するようになった生徒もいた。</p>

6 結果

(1) 目標と評価

- ・評価モデル4人の目標と評価を表2にまとめた。
- ・目標に照らし合わせながら、表情の変化、発声、視線、手や足の動きの見取りを評価の観点として設定した。
- ・評価は授業者7名から上記の観点について聞き取り整理した。

表2 目標と評価

生徒A	生徒B	生徒C	生徒D
【目標】	【目標】	【目標】	【目標】
腕を大きく振りながら、「きゃっきゃっきゃっ」と甲高い声を出して楽しい気持ちを表現する。	「びえー」と大きな声を出して楽しい気持ちを表現したり、目を見開いて動画の歌い手や触れ合う職員を注視し期待感を表したりする。	「いー」と優しく声を出しながら、にっこりと笑って楽しい気持ちを表現したり、動画の歌い手や触れ合う職員をじっと見続けたりする。	腕を前後に大きく動かしたり、「あーあー」と大きな声を出したりして、楽しい気持ちを表現する。
【評価】	【評価】	【評価】	【評価】
目標とした姿を見せた授業は2回あったが、それ以外はあまり反応が見られなかった。	授業を重ねるごとに、目標とする姿が見られることがやや増えた。	授業を重ねるごとに、明らかに目標とする姿が多く増えていった。授業の後半には、「あはは」と大笑いすることもあった。	授業を重ねるにつれて、表現が大きくなっていったり、表現の回数が徐々に増えていったりした。

(2) 目標の達成状況及び分析

① 生徒の様子の特徴

良かった点として、英語の音楽を聴いたり、英語の歌を歌いながら教師と一緒に触れ合ったりして、楽しそうに笑ったり声を出したりする姿が見られたことが挙げられる。例えば生徒Aや生徒Dは英語の音楽を聴き始めたときに、日本語の音楽の時と同じように、腕を大きく振りながら「きゃっきゃっきゃっ」と甲高い声を出したり、腕を前後に大きく動かしながら「あーあー」と大きな声を出したりすることがあった。これは、英語でも日本語と同じように好きな音楽として認識したからだと考える。そして、生徒Dの場合は授業を重ねるごとに英語の音楽に慣れていき、初回よりも様々な曲において終始体の動きや発声で楽しい気持ちを表現していた。同様に、生徒Bや生徒Cも授業を重ねるごとに、英語の動画を注視するようになっていたり、声を出しながら笑ったりするようになった。しかし、生徒Aは初回に楽しむ様子が見られたものの、その後の授業ではあまり反応が見られないときと楽しむ様子が見られるときがランダムにあった。これは、「ミュージックタイム」は何度も体調不良により欠席していたため、単純にその日の体調によって反応が左右されたのだと考えられる。実際に普段の生活でも週に2～3回欠席することがよくあり、学校に登校できた日は体調の具合によって、目標のような姿を見せることもある一方、一日中元気が出ないこともある。本単元では10回中6回欠席しており、目標とした姿が見られた日は英語の授業を重ねた成果であるとは断定しにくい。以上のことから、生徒Aは目標を達成できたとは考えづらいが、生徒B、生徒C、生徒Dについては、それぞれに程度のバラつきはあるが、目標は達成できたと判断した。

② 手立ての有効性

ア ●関わり合いや雰囲気作りの手立て

「●1～2」は、生徒が笑顔を見せたことや後半になるに従って楽しむ様子が見られることが増えたことから、楽しい雰囲気を感じ、繰り返し授業を重ねる中で見通しをもつことができたと考えられる。「●3」は、生徒の反応を見守ることで生徒の主体的な反応が見られることがあったが、全般的には積極的に言葉掛けをした方が動画や職員を見ると感じた。「●4～●7」は、“The Star Spangled Banner”や“Head, Shoulders, Knees and Toes”の活動に取り入れたことで、生徒と触れ合って積極的にコミュニケーションを取る場面を設けることができた。生徒はコミュニケーションを楽しみながら活動することができ、そのことも慣れない英語教材を学ぶことに役だったと考える。「●8～9」は、授業を重ねるごとに生徒の反応が見られるようになっていったことから、耳にしたことがある日本語の歌から、同じ歌でも英語の歌詞であるものへと変わっていく中で、生徒がそれを受け入れやすい状況を作ることができたと考えられる。

イ ▲視覚的な手立て

「▲1～2」は、動画を注視する姿が授業を重ねるごとに多く見られたため効果があったと考える。「▲3」は、反応の変化があまり見られず、有効であったとは言えない。「▲4」は、外国人に扮装した教師が登場したときににっこりと笑ったり、うれしそうに声を出したりする姿が見られたことから、生徒の興味関心を引くことができたと考えられる。また、スムーズにその後のダンス活動に取り組み始めたことから、教師の登場によって「英語でこれから踊る」というような見通しを簡単に持つことができたとも思われる。「▲5」は、単元の始めの段階では、英語の動画になると真顔になるなどして明らかに違いを感じる生徒がいた。その後、表情が少し柔らかくなったり、注視することが増えたりしたため、日本語と英語が違うことを感じることができ、

有効であったと考える。

ウ ■聴覚的な手立て

「■1～3, 6」は、初回の授業から笑顔になる様子が見られたことや、授業を重ねるごとに慣れていき、体を動かしたり笑ったりすることが増えたことから、有効であったと考える。「■4～5」は、単元の始めの段階では、英語の動画を聴くと目を見開いてきょろきょろと周りを見るなどして明らかに違いを感じる生徒がいた。その後、表情が少し柔らかくなったり、動画を見つめながら歌を聴き入る姿が見られるようになったりしたため効果があったと考える。「■7」は、授業を重ねるごとに英語の音楽に慣れ、体の動きや発声による表出が増えたことから、有効であったと思われる。

7 考察

(1) 重複障害児に対する指導の工夫

① ●関わり合いや雰囲気作りの手立て

特に有効であったと思われる手立ては、乳幼児の英語教育の特徴である歌やダンスを取り入れた学習に、教師が積極的に生徒に触れたり話し掛けたりする場面を取り入れたことである。最初は、慣れない英語の音楽を聴いて、目を見開いてきょろきょろと周りを見渡したり、真顔になったりする生徒がいた。しかし、身近な教師と触れ合い、コミュニケーションを取りながら楽しく活動をしていくことで、徐々に声を出しながら笑ったり体を動かしたりして楽しい気持ちを表現するようになっていた。難しい英語教材を重複障害児の指導に取り入れるにあたっては、ダンスなどの音楽と結びつかせ、親しい教師と関わりながら楽しんで学習する場面を設定することが有効であると考えられる。

② ▲視覚的な手立て

特に有効であったと思われる手立ては、乳幼児の英語教育の特徴であるキャラクターの使用などといった視覚的に興味を引きつけることである。視覚的に認知しやすい色をした動物などのキャラクターが登場する動画は、慣れない英語の音楽が流れても、最初から動画に注目する姿が多く見られた。そして、授業を重ねるごとに動画を好むようになり、声を出しながら笑ったり体を動かしたりして楽しい気持ちを表現するようになっていた。授業の後半では、期待感の高まりから、動画を再生する前から目を見開いて画面を注視する生徒もいた。また、英語の音楽とともに外国人に扮装した教師が登場した際も、表情の変化や発声から楽しむ様子が見られた。その楽しい気持ちとその後のダンス活動の導入につながり、慣れない英語でも楽しみながら活動することができたと思われる。よって、難しい英語教材を重複障害児の指導に取り入れるにあたっては、キャラクターなどを教材に取り入れられたり、興味を引くように教師が扮装したりして、視覚的にイメージを持ちやすいようにすることが有効であると考えられる。

③ ■聴覚的な手立て

特に有効であったと思われる手立ては、第二言語習得の過程で挙げられていた、聴覚刺激で注意をひき、それを維持するような工夫をするということである。同じ音楽を毎回の授業で使用したり、同じフレーズを繰り返して聴く歌を使用したりしたことで、生徒は見通しをもって慣れることができ、授業を重ねるごとに体を動かしたり笑ったりして楽しい気持ちを表現することが増えた。また、その繰り返しが単調にならないように、歌うスピードが曲の中で徐々に早くなるようにしたり、明るくテンポのよい音楽の後はしっかりと静かに聴き入る音楽にしたりするなど、授業構成にメリハリをつけたことで生徒の興味を持続できたと考える。よって、難しい英語教材を重複障害児の指導に取り入れるにあたっては、繰り返しの音楽を使用して親しみやすくするとともに、授業の流れを工夫して注意を維持することが有効であると考えられる。

(2) 英語教材活用の社会的意義

評価モデル4人の様子から、重複障害児に英語教材を用いた授業を行っても、目標は概ね達成できるということが分かった。英語教育の重要性が高まっている点や通常校との連続性を確保する点から、英語教材を重複障害児の指導に活用することは必要であると考えられる。また、指導の際に、生徒の障害の特徴や理解力、表現力に応じた工夫を行うことや、発達段階を考慮して、言語習得を目的とした意味理解をねらう代わりに、英語に親しみ、身の回りに溢れる英語の歌や外来語を耳にして楽しんだり、同じ年齢の人と英語の音楽などを交えて交流したりすることができる素地を身に付けることを目標とすることが大切だと考える。そして、ST7人に今回の授業についてアンケートを行ったところ、以下のようなことが挙げられた。

- ・「中学部1～3年生の生徒に、通常校の生徒と同じように英語を学ぶ機会を作ったことはとても良い。今回のように、ダンスや音楽などの好きなことを通して学習することで、重複障害児でも学校で英語を学ぶことができると感じた。」(50代男性)
- ・「学校生活では今まで英語を学ぶ機会はなく、また幼児教材を使用することが多かったので、今回のように通常校の生徒と同じように英語を用いた学習はとても意義があり、斬新であった。英語の意味理解ができなくても、音楽と結びつけて指導することで、生徒は英語を受け入れることができたと思う。」(20代女性)

他にも同じように肯定的な意見が多く見られた。重複障害児の指導に英語教材を取り入れることの意義を、他の教師とも共有することができたことが良かった。そして、本検証を通して、英語を学ぶということは社会的価値があると改めて感じた。普段は発達段階から幼児教材を使用していることが多いが、やはり生活年齢に応じた教材を使うことで周りの人の期待感も変わると考える。重複障害児も通常校の生徒と同じように英語を学ぶことができれば、共通教材を通して共通の文化を学び、共に触れ合う

機会が生まれると期待できる。インクルーシブな共生社会を築く一つの要素になれるのではないかと、英語教材を活用する社会的意義は大きく、重複障害児が通常教材（英語教材）へアクセスすることは可能であると考えられる。

8 今後の課題

(1) 授業構成

今回は全10回（週2回）の授業期間としたが、体調不良等による欠席が多く、指導が断続的になってしまう生徒もいた。また、授業日の間隔がやや長い印象もあった。そこで、このような英語にふれる授業を毎日行うことにすれば、欠席が多い生徒でも英語を学ぶ機会が確保されたり、他の生徒も英語にさらに慣れたりすることができると思われる。モジュール型にして、毎日少しずつ学習することも一つの手段である。また、授業回数が多いことから、使用する英語の曲を増やしたり、英語を使ったミニゲームを取り入れたりするなど、多様な授業構成が可能になると感じた。

(2) 教材分析

教材の難易度を工夫することが大切だと考える。今回は、普通の学校生活では英語教材はほとんど使われず、テレビ番組やCM程度でしか日常生活で英語を耳にしない生徒たちにとって、いきなり通常校や特別支援学級と同じような教材を用いるのは難しいと考えた。そこで筆者は、生徒の発達段階も考慮し、乳幼児の英語教育でよく使われ、キャラクターを使用した動画が多くある“ABC”や、ダンスによって動作と英語を結び付けることができる“Head, Shoulders, Knees and Toes”などの、英語圏の幼児向けの曲を導入に用いることにした。そして、これらの音楽を通して英語に少し慣れるようにしてから、生活年齢に応じた難易度の“Sukiyaki”を取り入れたのである。しかし今後は、連続性を確保する点から、“Sukiyaki”などの通常校の教科書に載っているような曲をより多く使っていくことが必要になると考える。英語の幼児教材から英語の生活年齢に合った教材へと、内容の難しいものへ発展させていくためには、年間を通したP D C Aサイクルで、重複障害児が学びやすいように授業をデザインしていくことが課題である。

(3) 手立て

今回は「関わりや雰囲気作り」、「視覚」、「聴覚」の観点で設定した。しかし、英語の歌詞に応じて、「触覚」の視点から物を触らせたり、「嗅覚」の視点から香りがあるものを提示したりするなど、他の感覚も積極的に活用した指導にすれば、より生徒の興味を引き、楽しい気持ちを出せる場面を増やすことができるのではないかと感じた。また、今回用いたそれぞれの手立てについても、テンポのよい曲と落ち着いた曲を混ぜるのではなくダンスを取り入れたアップテンポの曲を多用したり、日本語版と英語版の曲を対比させるのではなくオールイングリッシュの構成にしたりするなど、他の手段の方が効果的であった可能性もありえる。生徒の様子を見ながら、試行錯誤して工夫していくことが大切である。

(4) 交流及び共同学習などへの発展

学校で英語を学ぶ機会が定着していくと、交流及び共同学習では近隣の通常校の生徒と一緒に英語の音楽を聴いたり、ダンスをしたりしながら、一緒に英語を学ぶことができるのではないかと考える。むしろ、ビートルズやマイケル・ジャクソンといった世界的に人気な英語の曲を、通常校の生徒よりも重複障害児の方が楽しむことができることもあるかもしれない。そのようなことがあれば、互いの印象が変わってより尊重し合い、さらに意欲的な英語学習へと結びつくと考えられる。また、ALTと交流してネイティブの英語にふれることも面白い。声の質も外見も違う人と関わることで、人間関係の広がりを期待することができる。そして、英語圏の映画やアニメなどを通して外国の文化にふれる場を設けたり、地域に住む外国人と交流する行事を行ったりすることもできると考える。英語を学んだ後の展開には、このような様々な可能性があると考えられる。

本研究は、筆者にとって初めて、英語教材を取り入れた重複障害児の指導となった。指導を計画するにあたって、参考となる実践はほとんどなく、イメージをもつことが困難だった。しかし、冒頭でも述べたように、今後は共生社会の実現に向けて、同じ生活年齢の生徒が共通した教材を使って学習することや、通常校、特別支援学級、特別支援学校の間で連続性を意識した指導などがますます重要となってくる。そして、東京オリンピック・パラリンピックの開催やグローバル化の進行により、世界共通言語である英語の必要性がより高まっている。健常者でも障害者でも、障害の程度にも関わらず、英語を学ぶ機会を増やしていくことが大切であり、今後も英語教材を取り入れた指導の工夫に取り組んでいきたい。

9 文献

- ・川原佐公『発達がわかれば保育ができる！』ひかりのくに、2015年、172～191pp
- ・中央教育審議会（2016）幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）
- ・パッツィ・M. ライトバウン／ニーナ・スパダ、白井恭弘／岡田雅子訳『言語はどのように学ばれるか 外国語学習・教育に生かす第二言語習得論』、岩波書店、2014年、48～49pp、162～215pp
- ・バトラー後藤裕子『英語学習は早いほど良いのか』、岩波新書、2015年、172～178pp
- ・文部科学省（2017）小学校・中学校学習指導要領解説、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領
- ・幼児英語教育関連ホームページ等（ex, ECC KIDS「1歳半～3歳（ミニキッズ）コース（キッズイングリッシュワールド）」等）